死者を想像する日常

九・一一と三・一一を経て

天童荒太
tendo arata

二〇〇一年九月十一日に同時多発テロが起き、約ひと月後の十月七日、アフガニスタンへの報復攻撃が始まった。多数の人の命が奪われたことに対して、亡くなった一人一人のかけがえなさを深く弔う代わりに、さらに多くの人の命を奪うことが選択された……。

果てしなく暴力がつづくだけの、絶望的な行為に感じられたが、日本政府を初め、世界の主たる国々の政府も、今後の国益や外交を考慮してだろう、容認し、一般市民の多くも、世論調査などを見る限りにおいては、この報復的行動に賛意を示した。

たとえ、短期的には国益にかなったとしても、長期的には、人々が安心して暮らせる未来へつながらない選択であることは明らかだったし、倫理道徳の面でも、子どもたちに暴

力を是認するメッセージを残した点で、やりきれなさを感じた。何より、このことに関し、わたしという人間が、まったく無力だという事実に打ちのめされていた。「多くの人々の死にふれ、悲しみを背負いすぎて、倒れてしまった人」「何もする気にはなれず、ただただ悼んでいる」という人物のイメージが浮かんできたのは、この直後のことだった。

やがて、同時多発テロから一年、当地で大規模な追悼集会が開かれた。世界中の多くの人が、死者への哀悼の意をあらわしたが、誤爆で亡くなったアフガニスタンの子どもや女性ら一般市民の追悼集会が開かれたという話は、その後も寡聞にして聞かない。

人は皆、誰彼の差なく死ぬ。これを書いているわたしも、読まれているあなたも死ぬ。けれど、死んだあとの扱いは決して同じではない。生まれた場所、社会的階層、当人や遺族の地位や名声や所有する財産、生前の活動を誰がどう評価するかという点、また弔いに支払われる金額などで、人は死んだあとの扱いに様ざまな形の差をつけられる。

常識感覚で、ぼんやり理解していた真実だが、テロと報復、およびその後の死者への扱いの差異によって、あらためてこの不条理が胸元に突きつけられてくる想いがした。

もしも……この世界に、あらゆる人々の死を、何の区別もなく、幼い子どもであろうと高齢者であろうと、つらい事故や事件で亡くなろうと病死であろうと、日本人であろうと外国人であろうと、善人であろうと悪人であろうと、すべてを等しく悼める人がいたとしたら……少なくともわたしにとっては、その人こそが現代におけるヒーローに思えた。この人のことを、確かな形で存在させたいと願い、以後七年間、その人物と向き合った。

〈悼む人〉と名付けたこの人の内面を見つめるため、事件や事故で亡くなった人の現場を訪ねる経験を重ねた。亡くなった一人一人に顔を与え、かけがえのない人として心に刻むため、現場に立ち、死に心を添わせる。たとえば、火災で亡くなった人の現場では、自分の足もとに火が回り、煙で視界が断たれ、呼吸が苦しくなるという精神状態に自分を追い込んだ。ついには、立てなくなり、這うように自宅に戻って、その日は一日寝込んだ。

ほどなく通常のスピードでは歩けなくなった。人が亡くなった現場に向かって歩いているとき、裏路地、目の前の角、いま靴で踏んでいる道の上でも、人が亡くなった可能性があると思えたからだ。ひと足ごとに、人の死を想うと、ゆっくりとしか歩けなくなる。

そして、死に、このように心を添わせるかたちでは、自分の心身を早晩壊すと思った。

家族でも知人でもない者が、いかにして見知らぬ死者たちを、唯一の人として、永続的に悼むことが可能か……。葛藤しつづけた末に、亡くなった人が、「誰に愛され、誰を愛し、どんなことで感謝されたか」を知ることができれば、等しく、かけがえのない存在として、心に刻めると思った。三つの要件ならば、人に対して尋ねやすく、死者が多数となっても比較的覚えておきやすい。また、どんな人も、この三つはきっともちうると信じられた。

以後三年間、わたしは悼みの日記をつけた。新聞やテレビのニュースで知った死者が、「誰に愛され、誰を愛し、どんなことで感謝されたか」を、情報があればそれを元に、なければ想像して、日記に記す。見ず知らずの死者のことを、毎日考える行為は、当初は苦痛だったが、次第に慣れて、悼みをおこなわないと罪悪感にとらわれたり、死者の情報がないと息苦しいような心持ちになったりした。そうした時期が長くつづいたのち、次第に、日々の悼みの行為を、落ち着いておこなえるようになった。

さぞつらかったでしょう、と、のちに人から言われたが、むしろ生きることが楽になる自分を意識していた。人が亡くなることについて、単純に悲しい、忌むべきこと、とは思わなくなったし、自分の死も、ある種の諦念をもって身近に考えられるようになった。亡くなった人々の、楽しく人と語らい、笑っていた日々や、懸命に働き、温かく人を支えて

いたときの姿を想像するのは、人間の尊さを、あらためて感知する機会ともなった。

そうした体験を経て、〈悼む人〉を確かな存在に育み、一つの物語として発表した。

●

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が発生し、一万五千人を超える人が亡くなった。

ほどなく、複数の人々から、〈悼む人〉は、この震災をどう受けとめるでしょうか、彼が被災地を訪れたらどうするでしょうか、といった質問を受けた。

わたし自身は、〈悼む人〉の物語を上梓して、毎夜誰かを悼む行為はいったん終えた。新たな物語を届ける準備に入る必要があったし、通俗な人間であるわたしは、〈悼む人〉に似た行動をとることに、心身ともに窮屈さを感じるようになっていた。家族と暮らす日常の営みにおいて、毎日一定の時間を悼みに確保することも、限界に達していた。

それでも〈悼む人〉として生きた時間は、自分のなかに息づいていたし、彼の存在も身近に感じられる。その彼に、震災をどう受けとめるか、という人々の問いをぶつけてみた。困惑する彼の顔が見える気がした。悼みに行くかい、という問いに、彼は答えた。

「いまいる場所の悼みをおこない、予定の旅程に従って、各地で亡くなった人たちの死を悼んだのち、東日本を訪れたときには、人々から話を伺って、悼ませていただきます」

「つまり、あれほどの大惨事なのに、きみはいますぐ飛んでいかないのかい。多くの人が三・一一からあらゆることが変わったと語るけれど、きみには特別ではないの？」

そう問うわたしを、彼は不思議そうに見つめて答えた。

「ええ。亡くなったのは、その人たちだけではありませんから」

彼のこうした考えは誤解を生みやすく、ときに人を怒らせる。

けれど彼は日々、亡くなった人を、誰彼の差なく、等しく悼む行為をおこなっている。年齢も性別も出身も問わず、その人がどうして亡くなったかも問わない。彼が人に尋ねるのは、亡くなった人物が、「誰に愛され、誰を愛し、どんなことで感謝されたか」だ。

彼は、死に方に目を向けない。その人が生きた証（あかし）、生きたおりの輝き、生きてあとに残していくものの美しさを覚えようとする。だから、三・一一においてどれほどの多くの人が亡くなろうと、ほかの死や、ほかの悲しみと同等に、一人一人を見つめる。

たとえば、新聞のベタ記事にもならない交通事故で、愛する人を亡くした遺族の悲しみと、三・一一に被災した遺族の悲しみとに、報道の差ほどに違いがあるだろうか。

一万五千人という死者の多さを重く見るなら、十万人が亡くなる災害が起きたとき、前者は軽く見られることになるだろう。そして実際それは起きている。同じ年の九月、奈良県の十津川で土砂崩れと河川の氾濫により五人死亡、七人行方不明（同年九月末現在）という悲劇が起きたが、現在、三・一一のように覚えている人はどれほどいることか。

震災直後、わたしは西日本を旅した。街の喧噪はいつも通りでも、会って話せば、人は皆、震災について心を痛めていることが伝わり、被災者のために何かできないだろうかと話していた。三ヶ月後、また西を旅したとき、会う人の口から震災への言葉はあまり聞かれなくなった。東京でもその頃には、原発と放射性物質が話題の中心になっていた。

東日本大震災から一年の節目、特集の番組や記事が各メディアに溢（あふ）れた。だが一日過ぎると、極端な印象で震災関連の、ことに追悼的な話題は減った。震災関連の話題で取り上げられるのは「フクシマ」であり、被災地の話題が取り上げられるときには「復興」がキーワードになっている。二〇一二年九月現在、亡くなった人々に関する話題は、ほとんど表にあらわれてこない印象であり、ことに、なお三千人近くもいらっしゃる行方不明者の方々のことを、この社会はほとんど気にしていないように見受けられることに、心が沈む。

現代は、死者に対する想いがどんどん薄くなり、死者を忘れるまでの時間が短くなっているように感じる。いつ頃からか、参列した葬儀では、初七日も同時におこなうというケースが増えてきた。多くの人が再度集まる大変さや、遺族の責務からの解放など、様ざまな事情によるのだろうが、つきつめると、経済優先、生活優先、の文化がほの見える。

日本は経済的に豊かになったが、心は貧しくなった。とは、ここ二十年以上も耳目にしてきた言葉だ。それが昔との比較であることが、話を行きづまらせてきた。昔の人の心が決して豊かでなかった事例など（公害、差別、汚職等々……）幾らでも挙げられるからだ。現在のほうが良くなった点は多い。要は、昔に戻ろうとするのでなく、昔の良かった点は参考にとどめ、これからの社会の価値観や精神的規範を創造していくことだろう。

自殺者が三万人を超えつづけている。児童虐待も、DV（夫婦間暴力、ことに男性から女性への暴力）も、相談件数が最高数を更新しつづけている。人間関係から精神を病む人が増え、無縁社会という言葉が生まれ、孤独死する人々も増えていると聞く。こうした事象の根底に、死者（および行方不明者）の存在を、早々に忘れる、あるいは元から顔を見ないということが、習い性になってきている文化や価値観に、大きな原因があると、わたしは思っている。

死者を忘れていく社会は、結局のところ、生者も忘れていく社会だ。死者を数字化して語ることに慣れ、その多い少ないが関心の中心となり、一人一人がかけがえのない顔をもつ、唯一の存在だと考えられなくなった社会は、生者も数字化して考え、十把ひとからげ、誰であっても取り替えのきく存在として扱う。死者が、特別な存在でない限り覚えられないように、生きている人々も、ただ存在することだけでは、かけがえのない存在として認めてもらえず、安定した肯定感をもって生きてゆくことが難しくなっている。

数字で見える成果を幼い頃から求め、成果の出ないことに劣等意識を抱き、成果が出ても、すぐに別の競争に追われてゆとりを失う。恋愛や結婚や子育ても、他者との比較のなかで考え、人に勝らないと存在を認めてもらえない気がして焦り、孤独のなかで、自分の足を引っ張るように思える相手に、衝動的なつらさをぶつける。仕事や学業や友人関係も、「うまくいくかどうか」に自分のかけがえのなさを賭け、一、二度の失敗で絶望する。

逆に言えば、死者を想像する努力。どんな死者（行方不明者）も唯一の顔をもち、すべてがかけがえのない存在だったのだと意識してゆく日々の営みが、やがて文化となり、新たな価値観や倫理規範となって、上記の問題の歯止めの一つとなってゆくと考える。

この夏の盆、実家のある地方は、帰省の人々で混雑していた。家族の集まりや同窓会がいたるところで開かれているのを見聞きした。人と人とのつながりこそが幸福と語る人は、実はとても多い。人同士のつながりを幸福と感じさせるものは、実は「人は死ぬ」という事実だ。今日楽しく語らっていたのに、明日には一方が亡くなっているという経験は、年を重ねれば増える。そのことが、人と人とのつながりを貴重に感じさせる。生者たちの集いの幸福感を担保しているものの正体に、我々は恐れず、誠実に目を向けるべきだろう。

今日も人は亡くなり、明日も亡くなる。日本でも外国でも大勢が死ぬ。我々が実際に手を伸ばしてできることはほとんどない。だが、亡くなったのは、数ではないと考えることはできる。すべてを覚えておくことは無理でも、一人一人がかけがえのない人たちだったのだと意識することはできる。ニュースや新聞を流し見るのでなく、亡くなった人に想いをはせ、「誰に愛され、誰を愛し、どんなことで感謝された」人か、考えてみることはできる。

それを人々が習い性にしていけるかどうか……。わたし自身もいま、かつてのように日々の悼みを再開したいと考えている。

（てんどう　あらた・作家）
著書に『悼む人』文藝春秋